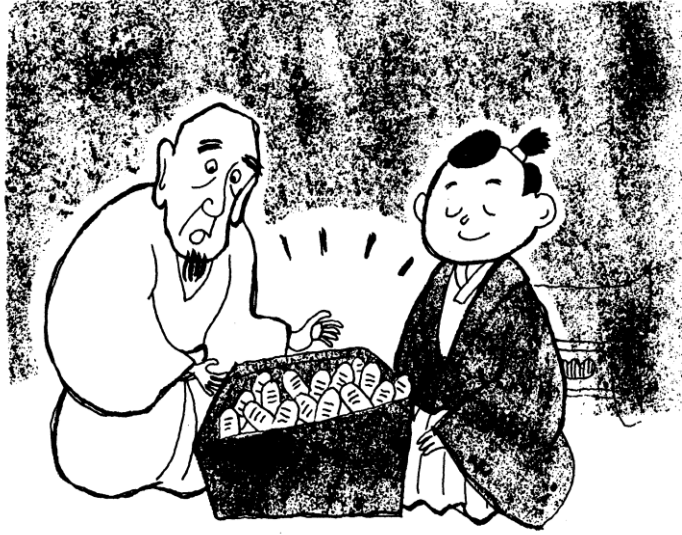


雪ゆきこんこんお寺てらの柿かきの木き



さむいふゆが、山やまをこえて川かわをこえて、山やまの山やま
のお寺てらへまでききました。お寺てらのごしよ柿がきがまっ赤か
にうれしました。おてらには、でこぼこあたまの
和尚おしょうさんが小坊主こぼうずと二人ふたりでくらししていました。

ごしよ柿…
くだものの柿の
しゅるいの一つ

ある日ひ小坊主が柿かきの木きへ上のぼって柿かきをたべていますと、山やまの下したをりつ
ばなお大名だいみょうのぎょうれつがのっしのっしと通りとおかかりました。

下したにいる 下したに

わきへよれ わきへ

こうれはさ

よういやさ

お国くにざかいのまつきの木きの下さがりえだ

おかごにはことしじゅうご十五わかぎみの若君わかぎみがのっじゅうごておいでです。と、とんびがピー

おかご…
人をのせて人が
はこぶのりもの

ヒヨロとないておかごの上へふんをしました。

「おかごのおとりかえ。」

家来がどなりますと、いまのと寸分ちがわな^{すんぶん}いおかごをもつてきま

した。ところが若君は、かごはあいた、馬をひけとおっしやつて、り

っぱなくりげの馬にめしました。と、またとんびがピーヒヨロとない

てお馬のあたまの上にポタリとおとします。

「お馬のおとりかえ。」

そのこえの下に、おなじとおりの馬をひいてきて、若君はそちらへ

すんぶん：わず
か、すこし

あいた：あきた

くりげ：くりい
ろのけ
めしました：お
のりになりました

のりかえました。と、こんどは若君のあたまの上へ、ピーヒョロ——
ポタリ。

「若君のおとりかえ。」

家来がどなって若君をひきずり下ろしたひょうしに、空から柿のえ

だをりようににぎった小坊主がおちてきて、お馬の上へヒョイとの

っかりしました。ぎょうれつはそのまま、こうれはさ、よういやさ、お

国ざかいのまつの木の下がりえだ——。

ふいに小坊主がいなくなってしまうて、和尚さんはふじゅうで大

よわりをしました。てんぐにでもさらわれたのかな、はやくかえつてくればいいがとおもっていますと、おしろの若さまわかの弟君おとうとぎみというかたがおおぜいけらいの家来けらいをしたがえてお寺てらへやってきました。

和尚おしょうさんはどぎまぎしてしまいました。が、おしばいで見たみせんだいはぎを思い出しおもて、

「これはこれは若君わかぎみさまには、ようこそこそごごにゆうらい。――」。

とあたまを上げあますと、おやおや小坊主こぼうずが若さまわかになつています。

「あ、おまえか――いや、ままえまえまからおうわさはうかがつておりま

せんだいはぎ…
かぶきのさくひ
んのひとつ

こにゆうらい…
はいっていらつ
しやる

したが、お目めにかかりますのは三年さんねんまえの——そうじゃない、いまが
はじめてでございます。」とあいさつしました。

こぼうず
小坊主はかみぎへすわって、チヨンマゲなんかあたまへくつつけ

て、和尚おしょうさんを見てみウソウソわらっています。

わか
「若わかさま、ないないでもうし上げあたいぎがございますから、お人ひとばら
いをおねがいたします。」

おしょう
和尚おしょうさんがいますと、若わかさまはみんなをふりかえって、

「そちたちは、しばらくあちらへ行ってまっていや。」

かみぎ…
えらいひとがす
わるせき

ないないで…
ないしよで
ぎ…こと
人ばらい…
ほかの人とお
ざけること

「ははあ——。」と、みんなはこえをながくひっぱって出^でていきまし
た。

「どうです和尚^{おしょう}さん。ハハハ。」

「じょうだんじやないよ。どうしたんだ、いったい。」

「どうしたのこうしたのって、柿^{かき}の木^きからおちたとおもったら、もう

お殿^{との}さまになっ^ていたんですよ。」

「ゆだんもすきもならないな。」

「和尚^{おしょう}さん。」

「うん？」

「和尚おしょうさんはいつもふゆになると、お金かねがあつたらおなかがはちきれ
るくらいおもちをたべてみたいといつてたでしょう。」

「ああ。」

「まってるっしやい——。だれかある、千りせんようばごを一つひとつこへも
つてまいれ。」

「ははあ——。」とまたおしばいのようなこえがして、お小姓こしょうの十三じゅうさん
七弥ななやと若井年之助わかいとしのすけとが千りせんようばごをおもそうにもつてきて出でてい

おこしょう…
きつようがかり

きました。

「こんなもんですよ、和尚おしょうさん。」

「いやはや、どうも。」とかんしんするばかりです。

「ところで、さっきいたもつたいぶつたじじいは、あれはなんだい？」

「あれはわたしの付家つけがろう老で、せんち清左衛門せいざえもんていうんですよ。」

「へんな名なだな。じゃあ、あのツンとしたはなのながい女おんなは？」

「わたしの乳母うばで重しげの井いていうんです。」

「生なまつちよろい、クラゲみたいのは？」

付家老…
おとのさまをか
んとくするひと

「あれは伊達与作だてのよさくっていつて、あれでもわたしのおうまの指南役しなんやくです

指南役…
おしえるかかり

よ。」

「いやはや、どうも。」と和尚おしょうさんはまたかんしんしました。

「おしろで毎日まいにちなにをしてるんだ。」

「することがないもんで、すごろくや貝合かいあわせばかりしています。お

あそびにどうぞ。ごちそうしますよ。」

「でもね、わしにはやっぱりこのお寺てらが一ばんいちいいんだよ。」

「そうですかね。じゃあ和尚おしょうさん、またきますよ。」

「若君さまのお立ちい——。」と、若さまはありのようゾロゾロみんなをあとにつけてかえっていきました。

和尚さんは千りようばこからこばんを一まいとり出して、くさいものでもかぐように、鼻のちかくまでもつてきてながめ、はなしてはまたながめました。こんどはさるみたいに、いきなりこばんにかみつきました。それからピヨイとほうり上げてうけとめ、

「なるほど。」とかんしんしたようなこえを出しました。

あるあさ——

さくやからの雪ゆきがやまずにふっています。いつもならとつくにおきて、あさのおつとめにかかるじかなのですが、さむいのでとこがぬけられません。

「小坊主こぼうずがいてくれたらいいのになあ。わしがおきようをあ上げるあいだに、いつもあの子こが水みずをくんでだいどころをして、わしがおつとめをすませてもう一いっぺんところへ入ると、まもなくあれが、しようじをあけて、和尚おしょうさんごはんですよ。——よかったなあ、あのころは。」

おや、だれかが水みずをくむつるべの音おとがします。気きのせいかなとおも

っていますと、だいどころからごはんのできるこうばしいにおいがしてきます。ゴリゴリおみそをする音がします。と、だれかがろうかをこつちへやってきて、しょうじをあけて手をついて、

「和尚さん、ごはんですよ。けさはさむいからお顔はお湯でおあらいなさい。」

小坊主です。いつもの、つんつるてんの白いきものにこしごろもピカピカひからせた青いぎんなんあたま。

「いやはや、どうしたんだ、おまえ。」

こしごろも…
はかまにたお
ぼうさんのふく

「にげ出してきたんですよ。おしろを。」といって、

「あそこは、そりやらくにはちがないけれど、だってねえ和尚さん、おしろうあそこにいるとまいにちおなががぺこぺこなんですよ。おいしそうな
ごちそうがで出て、それははしをおつけにならずに下へしたおさげなさい
まししげって重いの井がいってさげさせては、あとでじぶんと伊達与作とみ
んなたべちやうの。」

「ふといやつだな。」

「それにまだわたしじゅうさん十三だのに、きのうしらべひめ調姫とかいうお姫ひめさまが、

お人形にんぎょうをだいてわたしおくがたの奥方おくがたになりににやっててきて——。」

「へへえ。」

「わたしが、

あのあねさま いいあねさま

鼻はながちよつとまがつた

つていったら、なき出だしちやつたの。」

「ヒヒヒ。」

「和尚おしょうさん、また二人ふたりでくらしましようよ。お寺てらのほうがどんなにい

いか——。」

こぼうず
小坊主はなつかしそうに雪ゆきのふるにわをながめました。

おしょう
和尚さん、柿かきの木きが立たっていますよ。」

「あたりまえさ。」

柿かきの木きにすずめがきてますよ。」

「ふうん。」

おしょう
和尚さん。」

「ん？」

「ねえ——。」と小坊主こぼうずはいつて

「柿かきの木きはやっぱり柿かきの木きですね。」

「なにをばかな——。」

そうはいうものの和尚おしょうさんは、おかしくって、うれしくって、とこ

の中なかへあたまをかくしてグフグフわらいつづけました。

